

佐介稻荷大明神略縁起

相州鎌倉隠里佐介山稻荷大明神は人皇八十二代後鳥羽院の御宇右大将源頼朝公の再

建し給ふところなり。その縁由を尋ぬるに頼朝公いまだ伊豆蛭ヶ小島の配所にありし

時、一夜気高き老翁現われ、公は清和の嫡流にしてまさに天下を一統すべし、早く義

兵を起して奢れる平氏を討滅し宸襟を安んじ給へ、我は鎌倉鎮座の稻荷の神なり、時

節到来を告げ知らすなり、との御声とともに失給ふ。頼朝神勅の奇特に感じ居し折節

平氏追討の宣旨を賜わり義兵を催し、大敵悉く討滅し、征夷大將軍の位に任じ、鎌倉

大蔵に屋形を築き天下一統の礎を固め給へり。これ偏へに稻荷神靈の加護なり、速か

に社殿を造営し神徳を崇めまつらんと、屋形より西に当れる佐介山隠里の靈地を選び

畠山重忠に命じて社殿を造建せしむ。人みな尊崇し一山繁栄す。然るに頼朝公薨去の

後次第に衰微し、星霜とともに神徳埋もれ、和光同塵の神威を敬するものも稀れとな

れり。かくて時うつり寛元の頃、一人の聖僧あり、記主上人という。専修念仏の大道

をすすめ遍く四海に浄土門を弘め天照山光明寺を開基し給ふ。或る時上人隠里の辺を

過ぎ給ふに、多くの里童一匹の幼狐を捕えまさに打殺さんとす。上人深く憐み給ひ、

里童をさとして幼狐の命を救い給う。其の夜半、上人の夢に異形のもの現われ庭前に

上人を拝す。上人怪みて問へば答へて曰く、我は佐介稻荷神靈の使者白狐なり、今日

我が眷族まさに死命の折、尊師これを救い給う、高恩山海にも優れり、その万分にも
報い奉らんとて稻荷神霊の神勅を伝へ申すなり、即ち近く当国に病難起り老若多く重
病に悩むべし、其の折尊師此の種子を地におろし、生ぜし葉を病人に与へ給へ、疫病
忽ちに治すること疑いあるべからず、秘して衆民の救いとなし給へと、云ふかと思へ
ば夢さめ給ふ。見れば枕頭に一の紙包あり、改め見るに種子なり、上人神授の霊種な
りと秘藏し給う。程なく一郡痢病の難あり、里人多く病患の床に臥す、薬治祈禱みな
効なし。上人彼の種子を与へ地におろさしむ、三日にして長葉を生じ、病苦のもの其
の葉を用ゆるに癒へざるなし。人こそつて歡喜し上人の徳を称す。上人辭して曰く、
こは我が法力にあらず、佐介稻荷大明神の与へ給ふところの宝種なり、衆みな稻荷の
神霊を尊び其の恩を拝謝すべしと。貴賤群集して神霊を尊崇すること往昔にまさる。
上人更に諸人の助力を乞い社殿を再興し莊嚴を新たにす、世に記主を佐介上人と異名
するはこれに基くなり。上人中興し給ひしより以来、神徳更に輝き靈驗日にいやちこ
なり、殊に商売繁昌、大漁満船、病魔退散の靈驗顯然たり。仰ぐべし、信ずべし。

元 鎌倉図書館長 澤 寿 郎氏稿